

## 官兵衛を採る 12

智略を尽くして戦国の世を戦い、信長、秀吉、家康からも認められた官兵衛が最も重んじたものは一体、何であったか。それは人を大切にすることであろう。戦いとはいえ、なぜ多くの命が簡単に失われるのか、命を落とさずに済ませるすべはないのかと考えたに違いない。

官兵衛が戦いにおいて、相手への説得を重視した根底には、立場は違っても、お互い人間だから真摯に話し合えば分かり合えるはず、戦いは最小限でやるとうこの考えがあったであろう。戦に及んだ場合でも相手を殲滅しようと思わず、敵将が降伏すれば兵は許した。命を救われた者は喜んで官兵衛の下で働

## 生き方と人間像

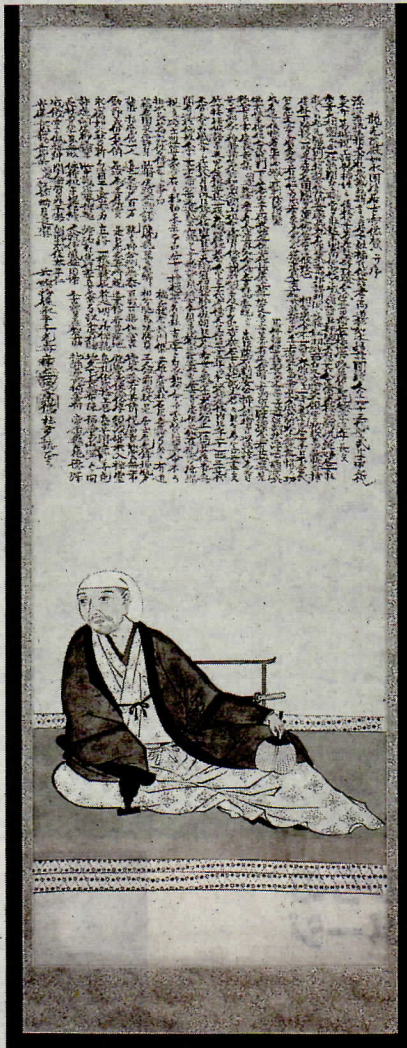
く。「人は殺すよりも生かして使え」である。

官兵衛は自らの政治理念を「如水遺事」の中で「神の罰より主君の罰おそるへし、主君の罰より臣下百姓の罰おそるへし」などと述べている。神の罰は祈れば許してもらえ、主君の罰もわびれば許してもらえ、家臣や百姓に疎まれると決度を買く。また、日々質素に暮らすにまかせて」。

「我人にこびず、富貴を求めず」そのものである。

官兵衛辞世の句が残っている。「おもひおく、言の葉なく、道はまよハし、な

# 現代に通じる官兵衛哲学



黒田如水像 宗儒賛 (福岡市博物館提供)

までの人生に思い残すことはいとの満足感が感じられる。

官兵衛の人間像を振り返ると、軍師のほか戦略家、外交官、政治家、文化人、キリシタン、技術者、教育者、哲学者の面を併せ持ち、先見性、洞察力に優れ、誠実で人間愛にあふれた人物であることが分かる。多くの戦国武将が減んでいく中で、生涯五十数回の戦いで一度も負けず、教育を重視し、幕末まで続く福岡藩の礎を築いた業績は比類ないものである。

失敗が許されない状況では相当自信のある計画でも、実行し成果を収めることは難しく、実績が重みを持つのは現代も同じである。「官兵衛哲学」と称される教えは官兵衛の豊富な経験、実績に裏付けられており、含蓄ある言葉の数々は今のわれわれにも糧となるであろう。

(播磨の黒田武士顕彰会理事 今藤久夫)